

北 桐 49

HOKUTOH



岩手大学教育学部同窓会

2010

目 次

表紙絵 「風景画」
黒石野中学校
2年 小川口 いつく

巻頭言

やわらかにしなう心で

教育学部長 長 澤 由喜子…… 1

特 集

岩手大学教育学部に期待すること

県教育委員長 八重樫 勝…… 2

桐の葉物語

力の源は楽しむこと

滝 浦 千加良…… 4

足どり

水 澤 雄 次…… 5

言霊～コトダマ

中 里 美 佳…… 6

伸ばしたい成長曲線

松 田 光 弘…… 7

しゃきょうの話

大 森 健 一…… 8

自分が変わらなければ！～貴重な音楽での体験～

三 上 聡…… 9

キャンパス便り

仲間からの褒め言葉

石 岡 拓 也……10

大学生活を振り返って

館 脇 玲……10

教員養成にかかわって感じていること

田 中 吉兵衛……11

思い出

退職に当たって

沼 田 稔……12

教育学部での研究

村 上 祐……12

活動報告

地域芸術文化支援をめざして

藁 谷 収……13

事務局便り	14
会計報告	15
北桐会役員一覧	16
支部役員・住所一覧	16
編集後記	17

2010

岩手大学教育学部同窓会



やわらかにしなう心で

教育学部長

長 澤 由喜子

昨年暮れにタクシーに乗ったとき、「不景気とは言っても食べることに困らなきゃ不満は言えませんね。先が見えない不安をみんながいっぱい持ってると・・・不景気よりもそのことの方が問題でしょ。」という運転手さんの言葉に納得してしまいました。さまざまな客に接し、社会の現況を肌で感じているタクシーの運転手さんだからこそ、その思いには確かさと重みがありました。

昨年8月の政権交代以来、さまざまな話題に振り回されつつも、誰もが先が見えない不安を抱えていることは確かです。教員養成にかかわっては6年制や免許法の抜本的改正等が注目されていますが、それについても先はまだ見えません。

大学では、第Ⅱ期中期目標・中期計画（平成22年度～27年度）を踏まえた大学運営が平成22年4月からスタートします。教育学部においては、第Ⅰ期中期目標・中期計画の最終年度である平成21年度に、大学院教育学研究科の第Ⅰ期改組として「学校教育実践専攻」が新設され、学部では学校教員養成課程・生涯教育課程・芸術文化課程のコース構成とカリキュラムにかかわる改組が行われました。平成22年度からスタートする第Ⅱ期中期目標・中期計画では、教育学研究科の第Ⅱ期改組として教科教育専攻の改組が真っ先に行われる予定でした。しかし、政権交代に伴う教員養成の制度改革の方向性が示されたことで、教育学研究科の第Ⅱ期改組に関するこれまでの構想では対応できないことになりました。昨年12月に開催された教育学部の外部評価において、外部評価委員のいずれの先生にも指摘されたことは、「学部のビジョンが見えないこと」でした。教育学研究科第Ⅱ期改組の棚上げによって、今後のビジョンを明確に示しにくい状況が続きますので、教育学部の先生方は先が見えない不安な思いで年を越したことになります。

今後の教員養成改革推進の中核を担っている鈴木寛文部科学副大臣は、ある教育雑誌の記事の中で、「学校は

何と言っても子どもと教師が主役で、地域の人や保護者が名脇役として固めます。『現場主義』ということが大切で、それをこれからも応援していきます。」と語っています。教育に限らず、「現場主義」はよく批判の対象になりますが、現在の研究科及び学部教育においてキーワードとしている「実践的指導力」の育成は、今後の教員養成の制度改革の方向性に沿うものとしてあります。平成21年度改組にはじまり、今後絶えることなく行われなければならないカリキュラム改革も、「実践的指導力」の育成を軸として進められています。しかし、「実践的指導力」は学生が備えるべき資質であってビジョンではありません。

地域の指導的役割を担う方たちが教育学部に求めているのは、アドミッション・ポリシーとしての理念ではなく、それを実現するために行政を含めて地域の人々といかに手を携えて教育システムを構築するか、その現実的な方略であろうと思います。その点を学部運営が担っていることを重く受け止め、教員養成改革にかかわる新たな情報に対応しつつ、教育の目標を見失うことなく、そこに至る現実的な手立てを整えることに力を尽くす必要があると思っています。先が見えない不安な今だからこそ「やわらかにしなう心」を持って柳のごとく教員養成に温かな陽光をもたらす春を待ちたいと思います。

昨年8月に前学部長の加藤義男先生の後を引き継がせていただきました。力量不足に悩みつつも、周りの先生方や職員の方々に支えられ、そして何より教育への熱い心を持った学生たちの姿に励まされながら、何とか与えられた役割を遂行したいと思っています。

北桐会のみなさまには、これまで長年にわたり、さまざまなかたちでご協力・ご支援をいただいております。改めて心から感謝申し上げますとともに、今後ともにご協力・ご支援、さらにはご指導を賜りたくお願い申し上げます。

[特集]



岩手大学教育学部に期待すること

県教育委員長 八重樫 勝

1 はじめに

「北桐」編集委員会から一通の手紙が届いた。「北桐」への寄稿の依頼である。かつて編集に携わったことのある者として、事情を察知して引き受けることにした。

いただいたお題は「岩手大学教育学部に期待すること」である。恐れ多くてそんなことを書けるわけがない。ただ、岩手大学のおかげで念願の教師になり、仕事を全うすることができ、今また母校で教員養成のお手伝いできることへの感謝の気持ちを込めて、駄文を認めることにした。

2 中高の先生のおかげで大学へ

中学校の担任の先生の影響で教師になることを中学時代に決めた。学歴もない親、経済的にも恵まれない状況の中で、すべてをわかって奨学金のことまでお世話して、高校進学を勧めてくださったのが担任の先生である。

また、高3の担任の先生の指導がなければ進路の実現はかなわなかったといってもいい。いよいよ進学先を決める時期になった時、岩手で教員をやるなら「岩手大学がいい」とのアドバイスがあった。「岩手大学でいい」ではない。「岩手大学がいい」である。特別奨学生の推薦をしていただいたのも担任の先生であった。

人間としての生き方を示したり、生徒の家庭の事情も知った上で進路指導をしたりする教師になろうと、その時決意した。

3 岩手大学に入学してよかった

昭和36年4月、憧れの大学の門をくぐった。「学芸学部」の名称のためか、教師を目指さない人もいたが、大

方は教師になった。就職支援は現在ほど懇切丁寧ではなく、先輩に聞いたり、同僚と相談したりして自分で開拓しなければならなかった。自立心があったといってもいい。

講義はもちろん、サークル活動や寮での集団生活、アルバイト等も「教師」になるための貴重な体験になった。

4週間の教育実習は楽しかった。出校したその日に、配属学級の先生から教科書を渡され、「明日から授業をやって下さい」と言われた。美術が専門のその先生は、校内事情により自分の学級だけ「国語」を担当していた。準備は大変だったが、かなりの時間を授業実習することになった。配属学級の子どもたちとは相当親密になることができた。別れがつかったのは当然である。教育実習は教師になる重大な転機になった。教科の指導はもちろん、生徒理解を深める大事な機会である。

その後何年かして実習校に勤めることになるとは夢にも思わなかった。

サークル活動の一環として、夏の合宿で地方の小学校を訪問したことがある。子どもたちや先生方とたっぷり触れ合う場面があった。その時のベテランの先生の「君はいい先生になれる！」という一言が忘れられない。自信を与える一言は人生を変えることがある。

昭和40年4月、晴れて岩手県の公立中学校の教員になることができた。以来38年間、県内の学校や教育委員会に勤め、平成15年3月、定年で退職した。中学時代からの夢であった「教師」になれたのは、岩手大学のおかげである。

4 岩手大学にお手伝いできて

(1) 「生徒指導」を担当

平成17年10月、「客員」を拝命し、「生徒指導」を担当

当することになった。大学生対象の授業は初めてであったが、生徒指導をめぐる諸問題について、「教師として」どう対応したらよいか、教師にならない人は「大人として」「親として」どう対処すべきかを説いた。これまでの体験や新聞記事等を使いながら、具体的に、実践的に話を進めた。実話をもとにした事例などに、学生の反応はよかった。学校現場で役立つものを彼らは求めていた。

(2) 「教職入門」を担当

「北桐」第48号（平成21年3月）で加藤義男教育学部長（当時）が、教育学部のカリキュラム改革について詳細に述べられている。特にも「実践的指導力の育成」を強化しようとしていることに大いに賛意を表したい。

「教職入門」は新入生全員に対して望ましい教師像等について指導する科目として、十数人の先生方が担当しており、素晴らしい取り組みである。

私は15時間のうち2時間分を担当した。「教師の魅力・役目」「教師になるために4年間をどう過ごすか」等を主として講義した。

教師の喜び、大変さ。卒業後も彼らの支えになれるやりがい。大学4年間のすべてが学びの場であること。本や新聞を読むこと等について、熱く語ったつもりである。

打てば響く学生たち——講義を通じて感じた彼らへの印象である。教師にならない、迷っているという学生も約3割いた。その彼らも将来どういう社会人、どんな親になるかを念頭において受講したようである。

どんな人間になってほしいか、どんな教師になってほしいか、「教える側の熱い思い」があれば、学生の心を引きつけ、学生の姿勢を変えることができると確信した。

学生の感想の一部を紹介する。

教師というのはただ「学校の先生」ではないと思いました。恩師と教え子というのは、教育の現場を超えて強いつながりがあり、それは一生続くものだというのを、先生の講義から感じました。

前回の講義ではまだスクールカウンセラーか教師か迷っていましたが、先生の講義を聞いて思いました。「先生になりたい」と。

改めて教師になることに魅力を感じられる講義であった。最近のメディアによる情報から得られることは、教師という職業は大変であるという印象しか持たなくて、教師になる自信が持てないでいたが、前回、今回の講義、あるいは他の講義を通じて、自分の教え子との関係について、うらやましく感じられ、私もそのような教師になりたいと思った。そのために今から、子どもと触れ合う機会があれば積極的に参加し、また自分を高める努力を続けたい。

5 終わりに——学部挙げて教員養成を

教職への道は、依然として狭き門ではある。しかし、教師を目指して入学した彼らの願いを実現させるのは大学の責務である。

全国どこに採用されようとも「使える！」と言われる人間にしたい。そして、教育界をリードしていくような教師として育成したい。即戦力のある教員を養成するために学部を挙げて更に力を注いでほしい。

- ① 人間として、教師として魅力ある人に。良きにつけ、悪きにつけ、教師の一言が子どもの一生を左右することがある。子どもや保護者に尊敬され、信頼されるような人間に育てたい。
- ② 学び続ける人間を育てる。学び続ける人間のみが子どもの前に立つ資格があることを学生時代に育てたい。
- ③ 社会人としてのマナーを身につける。きちんと挨拶ができない、服装が悪い、手紙一本書けないなど若者に対する指摘がある。学生生活を通じて社会人としてのマナーを身につけさせたい。それは教師になる第一歩である。

（昭和39年度 甲一類国語科 卒業）